

日本天文学会 早川幸男基金による 渡航報告書



ポスター会場。スペースが限られているからか、1つのポスターの掲示可能期間が1日だけだったのが残念でした。左手前にあるのは展示ブース。NASAが幾つも宣伝ブースを出していたのが、宇宙研の人間としては気になりました。

11月6日から11日におこなわれたアメリカ天文学会の高エネルギー天体物理学部門の年会、通称「HEAD (High Energy Astrophysics Division) meeting」に参加してきました。この会議の参加者は、主にアメリカのX線・ガンマ線天文学者なのですが、なんと参加人数が約480人という大規模なものです。今秋の日本天文学会の参加者が659人ですから、高エネルギー分野だけで73%に相当するのです。もちろん、その学会誌ApJにアメリカ外から多数の投稿があるように、国外（主にヨーロッパと日本）からの参加者も数割いるようですが、

プログラムは、朝8時に始まり18時に終わる、人によっては夜にもワークショップがある、という実にタフな生まれ方をしていました。会議場はホノルルのワイキキにあるホテルで、会議場のドアを開ければ目の前がホテルのプール・徒歩3分でビーチという絵に描いたような観光立地でしたが、泳ぐ時間がほとんどありませんでした。主催者側

から「ハワイの太陽は強いので、皆さんを保護するためにハードスケジュールを組んだ」という冗談が飛び出すほどでした。

口頭発表の完成度は極めて高く、多くは既にaccept/publishされたものでした。中でも1999年7月に打ち上げられた「Chandra」衛星の成果が特に目立ちました。X線領域では初めての0.5秒角の位置分解能を活かした研究（宇宙X線背景放射の点源分解とHSTでの光学同定、楕円銀河で～16個のブラックホール候補天体を発見など）が、やはり「Chandra」の真髄だなという印象を改めて受けました。

私は、「あすか」衛星のセイファート1型銀河「MCG-6-30-15」の長時間観測からえ



ホテルの部屋(25階)からの眺め。本当にキレイな海でした。

られた鉄輝線の特徴についてポスター発表をしました。Big Nameに宣伝し損ねたのは残念ですが、若手の方とは話す機会がもてて良かったです。

最後に、このような有用な会議に参加するための旅費を援助していただいた早川基金に対して感謝いたします。

松本千穂（宇宙科学研究所
宇宙科学企画情報解析センター COE 研究員）